

## コラム

## 乳幼児期は、親と子の育ちのとき

新宿区立愛日幼稚園長 佐藤 暁子

## ●はじめに

乳幼児をもつ保護者を調査対象とした「幼児の生活アンケート」は、早いもので3回目を迎える。「10年ひと昔」というが、子どもたちを取り巻く社会の状況も大きく変化してきている。

その期間の合計特殊出生率（1人の女性が生涯に産む子どもの数の目安）は、95年1.42、00年は1.36、04年は1.29とますます減少し歯止めがきかない。その要因として「安心して子どもを産み、育てる社会の仕組みや経済的安定がみられないこと」「核家族化、少子化による子育てへの不安」「母親の社会参加への意欲と乳幼児保育施設の不足」などさまざまなことが考えられる。

実際に子どもを産み育てていくなかで母親たちは「育児不安」に陥る場合がある。たとえば、遊び場の問題である。地域社会において同年齢の子どもたちとふれあうことのできる公園や広場では、世相の反映（若い子どもを狙った犯罪の増加など）から、子どもたちだけで安心して遊ばせることができなくなっている。そのため、子どもたちが心ゆくまで遊べる機会や場が減少し、直接的、具体的な体験に乏しく、生活経験が偏ってきている子どもの姿がみられる。

また、育児情報の氾濫は保護者の「育児不安」などを増幅させているようである。我が子が育児書通りに育たない、自

分の思い通りに育たないことに腹を立て、しつくと称して幼児虐待に及んでしまう悲しい事件も多く耳にするようになった。また一方で、親が我が子の将来を考えるあまり、子どもが低年齢のうちから早々と語学教育やさまざまな習い事をさせている姿もみられる。

21世紀をたくましく心豊かに生きていくために、今子どもたちに本当に必要なことは何かをしっかりと伝え、支えていく社会の構築が強く求められている。

私は何よりもまず豊かな本物の体験を通して子どもたちに生きる力を育てたいと考えている。子どもたちにとって必要なことは、自然と十分かわり、汗をかきながら自分の五感を通して得た感動や、試行錯誤を繰り返しながらやり遂げた達成感や自己有用感であり、人への信頼感であると考え。若い親たちには、かけがえのない我が子の成長発達をゆっくり見守り、今しかできないこと、今だからできることを大いに楽しみ子育てを通して親育ちをしていってほしいと願っている。

## ●アンケートの結果から

## 1) 幼児の生活が「早寝、早起き」に!

5年前の調査では、幼児の生活時間が夜型化していたが、今回の調査では「早

寝、早起き」になってきている。これは幼児教育年齢の早期化とも関係性があると思われる。

幼稚園の入園年齢が引き下げられ、3歳児保育が定着してきたことや、私立幼稚園などではバス通園が増えてきていることなどから、9時の登園時間に間に合うために、遅くとも7時30分頃には起きなければ間に合わないという現状もある。

一方で、年齢や就園状況によって睡眠パターンが異なるという結果も出ている。保護者の就労時間により、保育園の保育時間も長くなり、朝7時30分頃から夜の10時近くまでや24時間フレックスタイム制で預かる施設なども増えてきている。保育時間が長くなることで、子どもの睡眠時間も短くなってきており、保育園での午睡の必要性も出てきていると考えられる。子どもにとってふさわしい生活を過ごすために望ましい生活時間帯と母親の就業状況との関係についても配慮しながら、十分な睡眠時間をとり健康的な生活が過ごせるように心がけていきたい。幼稚園でも「仕事で父親が遅く帰ってくるころに起きて、ひと遊びしてしまうので、朝なかなか起きられなくて遅れて登園します」という連絡が入ることがある。必要な睡眠をしっかりと、しかも十分活動的に遊ぶ子ども本来の生活時間や生活習慣を確保していくことが大切であると考ええる。

## 2) 子どもにとっての遊びの必要性

5～10年前は、テレビゲームが全盛で幼児の生活にも影響が少なからず出ていた。幼稚園での生活のなかにもテレビゲームの話題が出ていたり「Aちゃんは、○面クリアー」などの会話が聞かれたりしていた。降園後の友達遊びのなかでも

室内でのテレビゲームが中心になり困って相談にくる保護者もいたことがあった。

そのような背景もあって多くの幼稚園では、子どもにとっての外遊びの必要性を保護者に伝えるようになってきている。私が勤務する幼稚園でも子ども時代に必要な体も心も弾ませて取り組める本物体験や経験の大切さについてさまざまな事例をもとに話し合ったり、保護者が一緒に参加し子どもたちと夢中になって遊んだり、親子での「ふれあい遊び」の紹介をしたりする保育参加の形態を取り入れたりするような取り組みを行っている。子どもたちが「遊びのなかで」「遊びを通して」学んでいく幼児時代ならではの特徴を生かした親子でのふれあいが増えてきていることは大切なことであると考ええる。

## 3) 親子・母子の時間を大切に 過ごそう！

平日に幼稚園・保育園以外で子どもが誰と一緒にいるのかをたずねたところ、「母親」が83.0%であった。これは一方で母子の絆の強さともとらえられるが、反面、核家族、少子化、不審者対策等の安全面の問題への不安もある。また、子どもたちにとって日常生活で一緒に遊んだり、かかわりをもったりする人が少ないのではないかとの危惧の念をもつ。

子どもたちが安心して地域の公園やさまざまなコミュニティを利用して遊べるような環境を地域社会のなかに創ることが必要であろう。子育てを母親1人に委ねるのではなく、いろいろな人と情報交換をしながら母親が子育て情報をキャッチし、共に遊ぶ喜びや学ぶ喜びを分かち合い、そして子育ての不安を解消していくという場を創っていくことが急務であろう。

今、幼稚園等の幼児教育施設では、地域の子育てセンターの核としての役割を果たしていくために、未就園児への遊び場開放や保育終了後の親子遊び場開放、預かり保育、子育て相談や講演会などを実施している。母親が子育てで孤立化するのではなく、子育ての喜びや楽しさを感じられるようにとさまざまな工夫をしている。たとえば、天気の良い日には、お弁当を作って親子でたくさんの友達が集うコミュニティに出かけて親子でふれあう楽しさを味わうのもよいし、保育者に子育ての相談をしてみたりするのもよいであろう。

そして、そのなかで得たたくさんの体験を通して、子どもたちに「豊かな感性」や「創造性」「想像力」が芽生え、次々と知的好奇心のアンテナが、子どもたちのネットワークにつながり、広がり、深まっていく。その連続性、循環性のなかで「豊かな心が育っていく」と確信する。

大好きなお母さんに絵本を読んでもらうゆっくりとした時間を大切に、一方でたくさんの友達のなかで新しい世界を切り開いていく時間を共有できることが子どもたちの世界には必要であると考え

#### 4) みんなで子育て議論を おおいにしよう！

「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」を感じる割合は64.3%であった。初めての子育てに戸惑い悩みを抱える母親は、昔も今も変わらない。変わったのは、周りの人たちに心を開いて相談したり、頼ったりするという行為が少なくなり、人と対面せずに電話相談やインターネットなどで解決する人が多くなってきたことではないだろうか。

私事で恐縮であるが、4歳と0歳の元気な孫が日曜日になると遊びにやってくる。どうやら4歳の孫は反抗期にさしかかり、弟が生まれたこともあって注目行動を取ることが多いようである。若い両親は、その一つひとつに戸惑い、どうしていいか悩むようである。

子どもがいたずらをしたときの父親のしかり方がとても乱暴でハラハラすると母親が言う。でもやさしく言っていたら、いつまでも直らないと父親は言う。聞いているジイジにバアバは、ただニコニコして「いたずらをして悪かったと顔に書いてあるときは、長く怒らないで、ポイントだけ話して、ギュッと抱きしめてあげるといいよ」と答える（あなたたちもそうやって育てられたんだよ…）。真剣に子育てに悩みながら立ち向かっていく若い両親にエールを送りながら、自分たちだけで子育てしようがんばりすぎず、周りの人たちにも心をつなぎながら、子どもを真ん中に皆が互いの知恵を出し合い、育てあっていくことの大切さを感じとってほしいと願っている。

#### 5) 父親の子育て参加のすすめ！

今回の調査で父親の家事・育児への参加状況については「ごみ出し以外、家事・育児への参加は増えていない」ことがわかった。現代の社会状況からいって、父親の就労状況は想像以上に厳しいものであると推察される。仕事から帰ってきて、我が子と遊びたいのはやまやまであろう。一緒にお風呂に入れる人は幸いで、我が子の寝顔を見て出勤し、帰ってきてまた我が子の寝顔に「ただいま」を言う父親もいるはずである。そこで時間の長さではなく、密度の濃いかかわりを考えることも必要なのではないだろうか。

私の勤務している幼稚園では、フレックスタイムで出勤する父親が、毎朝おしゃべりを楽しみながら女兒を送ってきてくれる。その父親は毎朝満面の微笑みを浮かべながら子どもとしっかりと手をつないでやってくる。ある男児の父親は、門のところで「じゃあな！」と友達に言うように声をかける。何分かこのやりとりに、私はたくさんの愛情と親子の絆を実感する。「できることから、まずやってみよう!」。別れた後の子どもたちのうれしそうな笑顔があることを伝え、お父さんたちにエールを送りたいと思う。

## ●おわりに

乳幼児期は、一人ひとりの幼児の個性や特性、発達の状況により表現のしかたもさまざまであるが、自分なりの方法で人とかかわり、さまざまな体験を繰り返しながら社会性を身につけ、主体的、能動的に生活しながら「生きる力」を身につけていく。また、遊びのなかで数を数え、道具を使ってさまざまなものを作り出していく。そして、友達とのコミュニケーションに必要な言語を身につけ、会話のキャッチボールが行われ心と心がつながっていく。

教科書や楽譜を見て学習するのではなく、経験することで学んでいく子どもたちの知的発達をこれからも育てていきたい。

